

## 成長産業『農業』

昨年のTVドラマ『下町ロケット』は、日本の農業を守るために、無人トラクターによる自動運転の実用化を目指す技術者たちの戦いをドラマにしたものでした。この物語は、ロケット打ち上げ失敗の責任をとり、宇宙科学開発機構を辞めて実家の佃製作所を継いだ主人公の佃航平が、佃製作所の社員たちとロケットエンジン用バルブシステムで大企業の国産ロケット計画に参入したこと、その後人工心臓弁「ガウディ」の開発に成功したことを題材に第1回の放送は終了しました。今回のシーズン2は池井戸潤さん第3弾「下町ロケット ゴースト」と最新作である第4弾「下町ロケット ヤタガラス」を原作に、農業機械メーカーとして社員たちと奮闘する姿が描かれていました。私はこのドラマを毎週欠かさず視聴し、ビデオまで撮って復習するという熱の入れようでした。

このドラマの中で主人公が言っていたように、日本の農業は就業人口の減少と就業者の高齢化、耕作放棄地の拡大など依然として多くの課題を抱えています。しかし、この下町ロケットで話題となった無人農業トラクターに象徴されるように、日本の農業は今変わりつつあるのではないかと感じています。全国的にみても企業の農業参入が加速し、ICT農業、AI、ロボットといった先端技術の農業界への導入を積極的に進めていく企業も出てきており、政府も農林水産業の成長産業化を後押ししています。日本の農業はこの25年間で農業経営体の4割が減少し、一経営体当たりの規模が大きくなりました。昔から行われてきた家族経営の農業から大規模な土地利用型経営、施設園芸的な経営に変わりつつあるということです。そこで、これからの農業には生産性や品質の飛躍的な向上を果たす意味で、ICT、IoT、AIロボット技術などを活用し、展開していくことが必要となってくるでしょう。

IoTにより農業データを活用して環境制御や生産管理による収量向上を図り、データを駆使した戦略的な生産、栽培データ分析による高品質化やブランド化を進め、生産工程の見える化による省力化など、これまで勘や経験に頼ってきた匠の技の見える化によって、誰もが取り組みやすい農業への改革を推進することなど、その重要性を主張する人も増えてきています。さらに、現在の深刻な人手不足に対応するためにロボット化・自動化による超省力化への推進など、AIやIoTを活用した農業の将来像を農林水産省も示しています。

皆さんがこれから生きていく時代は、日本は人口が減少し、2050年の国内人口は9700万人（24%の減少）と予測されています。日本の人口が減少していくということは、日本がこれから初めて経験することです。その一方で世界の人口は増加を続け、2050年には100億人に達し、10年前に340兆円だった世界の食料市場は、2020年には倍の680兆円になると予測されています。世界的な人口増と経済成長により、グローバル市場の拡大が必ずといっていいほど訪れるということです。このような状況下で日本の農業が勝ち残っていくためには、国内市場で国民に高品質で安全な農産物を安定的に供給するという役割を果たすと共に、海外市場で日本の農産物をどう売っていくかということ視野に入れた農業を行うことが重要だということです。そのために、高校で農業を学び、安全で安心な食料を生産し、加工し、販売することを学び、さらに農村生活や豊かな環境を創造することを学び、将来の農業という産業を、農村地域を支えていこうとする資質を身につけた皆さんの今後は、非常に重要になると私は思います。

農業を学ぶ皆さんには、成長産業となるこれからの農業を実践できる農業者、その農業を支える関係者、そして日本の農業を守る消費者となってほしいと願っています。農業を基幹産業とする島根県では、各地域の農業に元気があって、そこで働く農家に活気があってこそ地域振興や地域発展につながっていくものです。

皆さんの将来が、無人トラクターの開発にあたった佃製作所の人たちのように大きな夢を持ち、新しい未来を切り開いていけるよう期待します。